



TITLE:

保険の性格と構造(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

谷山, 新良

CITATION:

谷山, 新良. 保険の性格と構造. 京都大学, 1963, 経済学博士

ISSUE DATE:

1963-12-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211175>

RIGHT:

【 10 】

氏 名	谷 山 新 良 <small>たに やま しん りょう</small>
学 位 の 種 類	経 済 学 博 士
学 位 記 番 号	論 経 博 第 1 号
学位授与の日付	昭 和 38 年 12 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	保 険 の 性 格 と 構 造

論文調査委員 (主 査) 教 授 佐 波 宣 平 教 授 田 杉 競 教 授 山 本 安 次 郎

論 文 内 容 の 要 旨

保険の考案に近代経済学的手法を用い、

- (1) 生命保険が経済厚生、有効需要に如何に機能するか。
- (2) 生命保険において利子率の変動が保険者・保険契約者の収支に如何に作用するか。
- (3) 財産保険において保険料が商品価格の形成に如何なる意味をもつか。

について究明している。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文はつぎの三つの部分から成る。

- (1) 保険の国民経済的機能に関する研究
- (2) 保険の金融経済的機能に関する研究
- (3) 保険料の企業費用項目としての性格に関する研究

前二者で所得保険、後一者で資本保険が考察される。保険は所得保険と資本保険とから構成されとの見方をとる本論文では、したがって、上記(1), (2), (3), で保険全体にわたつての考察をなしたことになる。

(1)では、保険が経済厚生に如何に寄与するか、有効需要の増大・減少に如何に関係するかについて、ピグウ、ケインズの理論から特に近代経済学的な解析を与えている。特に深奥な研究とは言えないが、この方面での最初の試みとして注目すべき業績をあげている。

(2)では、ヒックス「価値と資本」の平均期間の理論を生命保険の収入・支出関係に適用し利子率の変動が保険者・保険契約者の収支状況に如何なる作用を及ぼすかについて、相当立ち入った研究を試みている。これはヒックス経済動学ならびに生命保険数学に深い理解があつてはじめて可能なことであつて、ヒックス経済動学理論の保険への適用として鮮かな成果をあげている。

保険学界に永くのこりうる大きな業績であるといつて過言でないであらう。

(3)では、海上貿易取引形態たるC I F契約における保険料の意義、役割を数学的に追求している。これは、佐波宣平による最近のC I Fに関する一連の研究に直接の刺激を受けて試みられた研究であるが、佐波とは研究方法を異にして成った殆んど独立の仕事である。ただし、佐波と同じく、保険料はコストの一部をなし、価格形成に参加するという同じ結論に到達しているのは注目に値する。佐波とはちがった研究方法を提示した点において、たしかに一つの業績を示すものといえる。

以上、三つの部分において、それぞれ、独自または新しい方法でもって保険学の領域に新しい一生面をひらいている。よって本論文は経済学博士の学位論文として価値あるものと認める。